

[論文]

## 幼児教育学科における教学 IR データ分析 成績指標および学生生活に着目して

三 好 力  
早 坂 めぐみ  
松 木 久 子

The teaching IR analysis in early childhood education department  
Aiming at the Grade Point Average and student's life

Chikara Miyoshi  
Megumi Hayasaka  
Hisako Matsuki

キーワード：IR、成績指標、GPA、学生生活、保育者としての就職

要約：本研究では、本校の教学 IR（教学部門に特化された情報収集とデータ分析）のために収集されたデータを元に幼児教育学科の特徴を探るべき様々な角度から分析を行った。本研究のために提供されたデータは、学生生活指標として入学時の「入学者アンケート」と「学修時間・学修行動アンケート」として、在学中の学生に各年度の学年末 2 月に行った悉皆調査であった。また、入試の選抜方式や成績指標として GPA と「不可」の数、「S」の数、退学者情報なども合わせて提供された。それらの結果、「不可」の数が一年次に多いことなどの特徴が見られた。また、「保育者就職」と「保育者以外の就職」の者に分類しての分析では、進路の差によって、学生生活の内容に特段の差はなかった。幼児教育学科第二部(夜間開講)に限っては保育者就職と保育者以外の者の間の図書館利用の頻度には有意差がみられた。GPA の平均値は、第一部、および、第二部ともに、保育者以外の進路に進む者よりも、保育者就職者のほうが有意に高かった。

## 1. 本研究の目的

昨今、高等教育機関において、IR(Institutional Research)と呼ばれる調査研究の活用を通じた教育活動の可視化ならびに IR データの分析結果を活用したさらなる教学改善をはかる試みが要求されている。特に教学部門の IR のことを教学 IR といい、これらに基づく分析結果を活用することにより、魅力ある教育機関創りの一助とする可能性も考慮するように促されている。

秋草学園短期大学は、以前から学生対象のアンケート調査を実施していたが、それを分析し有効に活用する機会がなかった。そこで本学では IR 推進室を設置し、今年度は、学科ごとの問題に対応するべく、個々に分析も試みることとなった。本研究は、教学各部門から提供されたデータから、2019 年 3 月に卒業した幼児教育学科の第一部および第二部の学生対象の調査データを分析した結果を示す。分析の背景にある問題意識には、学生の学習の現状分析をもとにした学習の質のさらなる向上、学生の本学に対する満足度を上げることによる学生の中途退学防止、学生の希望する進路の実現等がある。

本論文においては、大きく分けてふたつの観点から分析する。第一に、成績指標、とりわけ GPA に関する分析である。GPA は学生の学習実態を端的に表す指標であり、IR においても重要なデータである。中井・鳥居・藤井(2013)によれば、GPA を活用した先行研究として、学科別の GPA の変化の分析によって、カリキュラムや学習支援の課題を示した研究、1 年終了時と卒業時の GPA の強い正の相関があることから、初年次教育の重要性を明らかにした研究等がある(例えば、阿部、2013; 浜田、2012; 高橋・星野・溝上、2014)。それに対して、本学における IR 分析は緒に就いたばかりであり、これらの先行研究を参照しつつ基礎的な分析に着手しはじめたところである。本研究においては、たとえば成績評価の「不可」の数、入試方式と GPA といった分析結果を提示し、幼児教育学科における学生の学習支援について提起する。本論文の分析の観点の第二として、保育者養成という目的を担う幼児教育学科の卒業生の進路を「保育者就職」と「保育者以外」とに分けて、学生生活や GPA について検討する。幼児教育学科の特徴として、保育者就職に必要な免許・資格と、専門とする学習内容とが結びついていることがあげられる。こうした学科の特性を踏まえ、学生の進路と本学における学習や生活とを結びつけた分析は、今後も継続すべきである。

本研究の結果は 2019 年 3 月卒業者に限った分析結果であり、あくまで一つの傾向を打ち出しているに過ぎないにしても、今後の幼児教育学科における教育内容の充実、教学改善をはかる上での指針となるだろう。さらに本学の IR 分析に必要な調査項目の検討にも貢献すると考えられる。以下、2 節では成績指標に関する分析、3 節では進路別の学生生活の分析、4 節では考察と結論を示す。

## 2. 幼児教育学科における成績に関する分析

### 2-1. 問題

本節では、2019年3月に幼児教育学科を卒業した学年における成績に関する分析を行う。幼児教育学科に入学した学生の成績がどのように変化しているのか。また、入試制度と入学後の成績の関係や入学時の満足度とその後の成績などへの影響があるのかどうかを探索することは、今後の入試方法の検討や入学後教育、並びに入学後の学生指導の支援材料として分析することには意味があるであろう。そこで現在秋草学園短期大学 IR 推進室に提供されたデータを基に、可能な限り成績に関するデータを多角的に分析する。

なお、成績指標となるデータは、一部と二部により教員が異なり、評価指標も異なっているために厳密には比較することができない。しかし、それらは秋草学園短期大学のみの問題ではなく、小学校からの義務教育、他校における大学などにおいても同様のことがいえ、あくまでも教育支援やシステムを改善するために有意義な知見を得るための参考指標として用いるべく分析することとする。

### 2-2. 方法

本研究で分析対象者となったデータは、幼児教育学科の一部と二部を合わせて248名であった。内訳は幼児教育学科第一部(2年制)の2017年4月入学者166名、同学科第二部(3年制)の2016年4月入学者82名である。入学者のうち、規程年数で卒業しなかった者には、休学者・留年者・中退者が含まれ、分析に必要なデータ入力のない欠損値は分析ごとにリスト単位で除外することにした。

本研究で用いるのは、秋草学園短期大学 IR 推進室のメンバーが共有した幼児教育学科のデータである。「入学者アンケート」として、入学年の4月に在对学生に対して行われたものと「学修時間・学修行動アンケート」として、在学中の学生に各年度の学年末2月に行った悉皆調査の結果を用いる。

### 2-3. 分析

#### 2-3-1. 成績指標に関する基本的分析

秋草学園短期大学の幼児教育学科における成績に関する指標の基本統計量をはじめに抽出した。成績に関する分析項目としては、1年次のGPA(GPA算出方法について表1を参照)と2年次のGPA、さらに1年次成績表の「S」の数と2年次成績表の「S」の数、及び1年次の「不可」の数と2年次の「不可」の数である。それぞれを成績指標の項目として基本統計量を表2に示す。

表 1 GPA 算出方法

(履修登録科目の単位数×GP)の合計  
履修登録科目の総単位数

区分	評価	評価(成績評価基準)	GP	区分	評価	評価(成績評価基準)	GP
合格	S	100~90点	4.0	不合格	F	59~0点	0.0
	A	89~80点	3.0				
	B	79~70点	2.0				
	C	69~60点	1.0				

表 2 成績指標に関する基本統計

		GPA一年次	GPA二年次	S(一年次)	S(二年次)	不可(一年次)	不可(二年次)
度数	有効	227	221	232	223	232	223
	欠損値	21	27	16	25	16	25
平均値		2.49	2.54	5.66	4.55	1.45	0.87
中央値		2.57	2.62	5.00	4.00	0.00	0.00
標準偏差		0.65	0.61	4.32	3.60	4.63	2.81
最小値		0.06	0.39	0	0	0	0
最大値		3.61	3.60	19	15	32	17

成績表の「S」の数については、学生の履修上の科目選択数によって最大数が変わるため、本調査の最大値が全ての学生の最大値としてみることはできない。1年次と2年次における成績表の「S」の取得に関する度数分布表を表3に示す。

表 3 1, 2年次の成績表の「S」の度数分布表

1年次のSの数			2年次のSの数		
度数	累積パーセント		度数	累積パーセント	
0	19	8.2	31	13.9	
1	24	18.5	22	23.8	
2	20	27.2	23	34.1	
3	24	37.5	26	45.7	
4	25	48.3	26	57.4	
5	20	56.9	17	65.0	
6	13	62.5	14	71.3	
7	14	68.5	15	78.0	
8	18	76.3	12	83.4	
9	12	81.5	12	88.8	
10	9	85.3	6	91.5	
11	8	88.8	8	95.1	
12	5	90.9	7	98.2	
13	5	93.1	2	99.1	
14	7	96.1	1	99.6	
15	3	97.4	1	100.0	
16	1	97.8			
17	4	99.6			
19	1	100.0			
合計	232		223		
欠損値	16		25		
	248		248		

幼児教育学科においては、保育者養成校としての履修科目の設定があるために一般大学や本校の文化表現学科のような自由度はそれほどない。しかしながら、保育士資格と幼稚園教諭の免許を両方取得する学生とどちらか一方取得を目指す学生、また卒業のみを目指す学生では、最低取得単位数は自ずと変わってくるため、注意が必要である。

「不可」の取得数については、1年次の平均が 1.45 ( $SD=4.63$ )、2年次の平均が 0.87 ( $SD=2.81$ ) ということ、1年次の平均が高く分散も大きいことがわかる。これは、高校での授業形態と異なることが多く、また専門科目も多いために定期試験勉強の仕方などわからずに戸惑ってしまいミスすることが多くなることも推測される。また、2年次になると定期試験の勉強方法なども慣れてくるために自分なりの対処法を身につけ適応していることが考えられる。それ以外にも1年次に大量の「不可」を取ってしまった学生は、モチベーションが下がってしまい進路の変更を検討し、休学や退学などの選択を取るために対象データからは外れてしまった結果、最下位層の学生がいなくなり上位の学生しか残らないという結果も推察される。

「不可」の取得数を度数分布分析として、表 4 に示す。「不可」の数が 90%ラインになるのが1年次では2科目であり、10%の学生が3科目以上落としていることになる。2年次でもほぼ同じような数値になっており、卒業がかかっていることから考えると2年生の方が問題は深刻ともいえる。保育者養成校は資格取得と単位修得が一体化しているところがあることから、単位の未修得は、卒業はできても資格取得ができないという問題を生むために2年次の20%弱の学生が1科目以上落としていることは、学科としても把握しておくべき事実であろう。

表 4 1, 2年次の成績表の「S」の度数分布表 (不可の数が 0~5 まで)

1年次の不可の数			2年次の不可の数	
不可の数	度数	累積パーセント	度数	累積パーセント
0	175	75.4	181	81.2
1	28	87.5	17	88.8
2	7	90.5	7	91.9
3	2	91.4	2	92.8
4	1	91.8	3	94.2
5	2	92.7	1	94.6

## 2-3-2. 一部と二部による違いの検討

秋草学園短期大学幼児教育学科には、昼間開講(2年制)の一部と夜間開講(3年制)の二部が併設されている。昼間部の一部は、1限から5限の9:00~17:50までの開講で、夜間部の二部は、6限~7限の18:00~21:10までの開講となっている。専任教員の多くは一部と二部の授業の多くを兼任しているが、担当授業数の関係で兼任講師の教員に依頼することも多く、一部と二部により教員が異なることも少なくない。

一部と二部による成績指標を  $t$  検定において分析を行った。その結果を表 5 に示す。その結果、成績表の一年次「S」の取得数( $t = 5.85, df = 196.85, P < .001$ )と二年次「S」の取得数( $t = 4.32, df = 160.30, P < .001$ )について二部よりも一部の方が有意に「S」の取得数が多かった。それ以外の一年次の GPA( $t = 0.75, df = 225, n.s.$ )、二年次の GPA( $t = 0.54, df = 106.76, n.s.$ )、一年次の不可( $t = 0.57, df = 230, n.s.$ )、二年次の不可( $t = 1.45, df = 91.71, n.s.$ )については有意な差は認められなかった。

成績表の「S」の取得数については、一部と二部では一年間に取得できる科目数が異なるため、「S」を多く取得する学生の間で差が出てしまう。二部では、履修科目の上限が一部とは半分近い差があるためにこのような差がみられたと考えられる。しかしながら、不可数に関しては、不可を取らないことが望ましいことからその取得数においては参考になると考えられる。特に二年次では、統計的な差はないにもかかわらず、二部の方が若干高くなっていることが示されている。

表 5 一部と二部ごとの成績指標の  $t$  検定

	一部		二部		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
GPA一年次	2.51	0.65	2.44	0.67	0.75
GPA二年次	2.59	0.54	2.45	0.74	1.46
S(一年次)	6.59	4.50	3.63	3.07	5.85 ***
S(二年次)	5.21	3.64	3.17	3.13	4.32 ***
不可(一年次)	1.57	5.19	1.19	3.10	0.57
不可(二年次)	0.64	2.11	1.35	3.86	1.45

\* $P < .05$  \*\* $P < .01$  \*\*\* $P < .001$

## 2-3-3. 入試方式による成績指標の違いについての検討

秋草学園短期大学幼児教育学科の入試制度には、多様な入試方式が設定されている。入試方式は、① A O 特待入学試験、② A O 入学試験、③ 秋高特待推薦(併設校推薦入試)、④ 指定校推薦、⑤ 公募推薦、⑥ 自己推薦、⑦ 一般入試、⑧ 社会人入試、⑨ 特別推薦がある。そこで、入試方式により入学してきた学生の成績指標が異なるのかを一要因の分

散分析により検討した (表 6)。その結果、一年次の GPA のみ  $F(8, 218) = 2.90$  で、1% 水準で有意差があった。その後の多重比較 (Tukey 法) では、① A O 特待入学試験 (3.15) が⑨ 特別推薦 (1.49) よりも GPA の数値が有意に高いという結果であった。

その他、統計的に明らかな有意差はないものの「S」の取得数などは、① A O 特待入学試験が一年次 12.75、二年次 8.50 と他の入試方式よりもかなり多いことがわかる。また、一年次の不可数などは、⑤ 公募推薦 (4.62)、⑨ 特別推薦 (7.50) と他の入試方式よりも多いことがみてとれる。

表 6 入試方式による成績指標の違い

	一年次のGPA	二年次のGPA	一年次のS取得数	二年次のS取得数	一年次の不可数	二年次の不可数
	$M(SD)$	$M(SD)$	$M(SD)$	$M(SD)$	$M(SD)$	$M(SD)$
① A O 特待入学試験	3.15 (0.33)	3.17 (0.30)	12.75 (4.79)	8.50 (3.11)	0.50 (1.00)	0.00 (0.00)
② A O 入学試験	2.34 (0.68)	2.44 (0.55)	5.26 (4.45)	4.18 (3.27)	1.88 (5.26)	1.03 (2.70)
③ 秋高特待推薦	2.51 (0.39)	2.55 (0.38)	5.09 (3.16)	4.29 (3.21)	0.18 (0.58)	0.26 (0.79)
④ 指定校推薦	2.50 (0.68)	2.54 (0.65)	5.91 (4.49)	4.58 (3.67)	1.34 (4.38)	1.03 (3.34)
⑤ 公募推薦	2.65 (0.72)	2.55 (0.91)	4.92 (5.12)	4.73 (5.35)	4.62 (9.31)	2.00 (3.82)
⑥ 自己推薦	2.53 (0.50)	2.57 (0.49)	4.25 (2.60)	3.00 (1.69)	0.38 (0.52)	0.25 (0.71)
⑦ 一般入試	2.71 (0.46)	2.80 (0.39)	6.43 (3.78)	6.71 (3.95)	0.14 (0.38)	0.14 (0.38)
⑧ 社会人	3.19 (0.30)	3.27 (0.24)	7.25 (1.50)	7.25 (2.06)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)
⑨ 特別推薦	1.49 (0.93)	1.65 (1.02)	2.75 (3.59)	1.00 (1.00)	7.50 (7.55)	1.33 (2.31)
$F$ 値	2.90 (8, 218) ** 1 > 9					

\*\* $P < .01$  \*\*\* $P < .001$

#### 2-3-4. 大学入学満足度と入学後の成績指標との関係による検討

秋草学園短期大学では、新入生オリエンテーション時に学生アンケートをとっており、その時点での入学満足度を図 7 に示す。1「不満」～5「満足」までの 5 段階評価となっている。この時点では「1. 不満」はないものの「2. やや不満」は 4 人となっている。この時点で不満を持っている学生がいることがわかる。しかし、全体的には高評価であり、学生が期待に胸を膨らませていることがうかがい知れる。

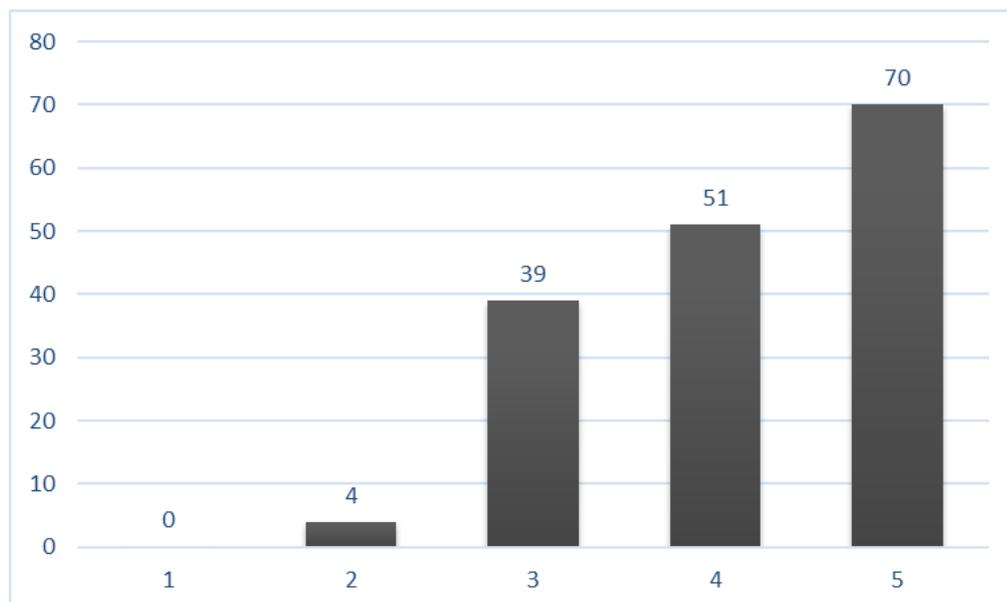


図 7 大学入学満足度

この入学時点での満足度と入学後の成績指標に関係があるのかを Pearson の相関係数を用いて検討した (表 8)。その結果、大学入学の満足度と入学後の成績指標との間には、相関は認められなかった。相関係数がほぼ 0 であることから入学時点での満足度は、どの時点でも成績に影響を与える要因ではないことがわかる。それに対して、成績指標間にはいずれも高い相関が認められた。

表 8 大学入学満足度と成績指標の相関

	大学入学の満足度	一年次の GPA	二年次の GPA	一年次の S の取得数	二年次の S の取得数	一年次の不可数	二年次の不可数
大学入学の満足度	—	0.07	-0.05	-0.02	-0.12	-0.12	-0.02
一年次の GPA		—	.958**	.796**	.700**	-.704**	-.483**
二年次の GPA			—	.762**	.757**	-.645**	-.628**
一年次の S の取得数				—	.742**	-.350**	-.293**
二年次の S の取得数					—	-.322**	-.316**
一年次の不可数						—	.345**
二年次の不可数							—

\*\*  $P < .001$

また、大学入学時点での満足度ごとの入学後の成績指標を一要因の分散分析を行ったところ主効果はいずれにおいても確認されなかった (表 9)。

表 9 大学入学満足度ごとの成績指標

	一年次のGPA	二年次のGPA	一年次のS取得数	二年次のS取得数	一年次の不可数	二年次の不可数
	<i>M(SD)</i>	<i>M(SD)</i>	<i>M(SD)</i>	<i>M(SD)</i>	<i>M(SD)</i>	<i>M(SD)</i>
2. やや不満	2.21 (1.48)	2.98 (0.39)	7.50 (5.80)	9.33 (2.52)	7.00 (14.00)	0.33 (0.58)
3. 普通	2.54 (0.72)	2.66 (0.60)	7.33 (4.90)	6.03 (3.53)	1.75 (4.30)	0.45 (1.46)
4. やや満足	2.45 (0.57)	2.50 (0.49)	5.65 (3.82)	4.53 (3.27)	1.67 (5.91)	1.02 (2.96)
5. 満足	2.58 (0.61)	2.61 (0.55)	6.88 (4.69)	5.20 (3.85)	1.09 (4.23)	0.45 (1.66)

### 3. 保育者として就職した学生の短大生活

#### 3-1. 問い

本節では、2019年3月に幼児教育学科を卒業し、保育者として就職した学生を対象に、短大在学中の学生生活について分析する。

分析対象者の数を確認しよう。分析対象者は、表10の「卒業者」に該当する計187名である。幼児教育学科第一部（2年制）の2017年4月入学者166名のうち2年で卒業した者は132名、同学科第二部（3年制）の2016年4月入学者82名のうち3年で卒業した者は55名だった。なお、入学者のうち、規程年数で卒業しなかった者には、休学者・留年者・中退者が含まれる。

入学者のうち規程年数で卒業した者を、進路を「保育者就職」と「保育者以外」に分類し、それぞれの学生生活について比較する。「保育者就職」の定義は、進路先が公立保育園、公立保育園（臨時）、私立保育園、私立幼稚園の者である。「保育者以外」はそれ以外の進路のすべてを含み、施設、サービス、進学、不明等に該当する者である。「保育者就職」をした者は、幼児教育学科第一部の卒業者132名のうち112名（84.8% = 112/132 \* 100）、同学科第二部の卒業者55名のうち43名（78.2% = 43/55 \* 100）であった。

本節の分析対象者は、幼児教育学科第一部あるいは第二部に入学し、休学・留年等を経ずに2019年3月に卒業できた者ということになる。

表 10 分析対象者数

	入学者	卒業者		
		保育者就職	保育者以外	計
幼教一部	166	112	20	132
幼教二部	82	43	12	55
計	248	155	32	187

注 「卒業者」の卒業年は2019年3月。幼児教育学科第一部は2年制課程であるため入学は2017年4月、第二部は3年制課程であるため入学は2016年4月である。

#### 3-2. 分析方法

本研究で用いるのは、秋草学園短期大学 IR 推進室のメンバーが共有した幼児教育学科

のデータである。入学年の 4 月に在學生に対して行われた「入学者アンケート」、および、在学中の學生に対して各年度の学年末 2 月に行った「学修時間・学修行動アンケート」の結果を用いる（いずれも悉皆調査）。

分析項目には、通学時間、アルバイトの時間、教員への質問の頻度、授業以外での調べ学習や勉強の頻度、図書館利用の頻度、2018 年度 GPA を用いる。

まず、進路が「保育者就職」者と「保育者以外」の者（以下の本文では、「保育者就職者」と「保育者以外の者」と表記する）とのあいだで、通学時間、アルバイトの時間、教員への質問の頻度、授業以外での調べ学習や勉強の頻度、図書館利用の頻度に関する回答の比率の差について、カイ二乗検定を行う。

次に、進路が「保育者就職」者と「保育者以外」の者に対して、2018 年度 GPA の平均値の差の検定（ $t$  検定）を行う。

### 3-3. 「保育者就職者」と「保育者以外の者」の比較分析

#### 3-3-1. 学生生活に関する分析

##### (1) 通学時間

通学時間の単純集計は、表 11 のとおりである。

幼児教育学科第一部の保育者就職者、保育者以外の者との間で、通学時間に有意差はみられなかった（ $\chi^2(3, N=130)=3.580, n.s.$ ）。同学科第二部においても、保育者就職者、保育者以外の者との間で、通学時間に有意差はみられなかった（ $\chi^2(2, N=60)=.401, n.s.$ ）。第一部、第二部ともに、通学時間は「1 時間 30 分未満」が大半であることがわかった。

表 11 通学時間

		30分未満	30分から1時間 未満	1時間から1時間 30分未満	1時間30分から 2時間未満	計
幼教第一部 (N=130)	保育者就職(N=110)	16.4%	40.0%	33.6%	10.0%	100.0%
	保育者以外(N=20)	15.0%	25.0%	55.0%	5.0%	100.0%
幼教第二部 (N=60)	保育者就職(N=48)	33.3%	33.3%	33.3%	0.0%	100.0%
	保育者以外(N=12)	25.0%	41.7%	33.3%	0.0%	100.0%

##### (2) アルバイト時間

アルバイト時間の単純集計は、表 12 のとおりである。

幼児教育学科第一部の保育者就職者、保育者以外の者との間で、アルバイト時間に有意差はみられなかった（ $\chi^2(4, N=124)=2.008, n.s.$ ）。同学科第二部においても、保育者就職者、保育者以外の者との間で、アルバイト時間に有意差はみられなかった（ $\chi^2(3, N=56)=2.864, n.s.$ ）。

いずれの類型においても、アルバイト時間が「10 時間以上」が最多であった。アルバイ

ト時間は、学業や学修時間に直接的に影響する要因であることから、実際のアルバイト時間についてより詳細に実態を把握する必要がある。

表 12 アルバイト時間

		していない	2時間未満	2時間から 5時間未満	5時間から 10時間未満	10時間以上	計
幼教第一部 (N=124)	保育者就職(N=106)	20.8%	.9%	8.5%	23.6%	46.2%	100.0%
	保育者以外(N=18)	22.2%	0.0%	0.0%	22.2%	55.6%	100.0%
幼教第二部 (N=56)	保育者就職(N=46)	4.3%	0.0%	6.5%	26.1%	63.0%	100.0%
	保育者以外(N=10)	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	100.0%

### (3) 教員への質問の頻度

教員への質問の頻度の単純集計は、表 13 のとおりである。

幼児教育学科第一部の保育者就職者、保育者以外の者との間で、教員への質問の頻度に有意差はみられなかった ( $\chi^2(3, N=129)=3.421, n.s.$ )。同学科第二部においても、保育者就職者、保育者以外の者との間で、通学時間に有意差はみられなかった ( $\chi^2(3, N=59)=3.153, n.s.$ )。

表 13 教員への質問の頻度

		しない	あまりしない	時々する	よくする	計
幼教第一部 (N=129)	保育者就職(N=109)	13.8%	39.4%	38.5%	8.3%	100.0%
	保育者以外(N=20)	30.0%	30.0%	35.0%	5.0%	100.0%
幼教第二部 (N=59)	保育者就職(N=47)	23.4%	14.9%	48.9%	12.8%	100.0%
	保育者以外(N=12)	41.7%	25.0%	25.0%	8.3%	100.0%

### (4) 授業以外の調べ学習の頻度

授業以外の調べ学習の頻度の単純集計は、表 14 のとおりである。

幼児教育学科第一部の保育者就職、保育者以外の者との間で、授業以外の調べ学習の頻度に有意差はみられなかった ( $\chi^2(3, N=129)=2.951, n.s.$ )。同学科第二部においても、保育者就職、保育者以外の者との間で、授業以外の調べ学習の頻度に有意差はみられなかった ( $\chi^2(3, N=59)=.278, n.s.$ )。

前項の「教員への質問の頻度」に比べると、「授業以外の調べ学習の頻度」のほうが「よくする」および「時々する」と回答した比率が高い。教員に質問するよりも、自主的な調べ学習のほうが、より頻度の高い学修スタイルであることがわかる。

表 14 授業以外の調べ学習の頻度

		しない	あまりしない	時々する	よくする	計
幼教第一部 (N=129)	保育者就職(N=109)	11.9%	25.7%	52.3%	10.1%	100.0%
	保育者以外(N=20)	0.0%	25.0%	60.0%	15.0%	100.0%
幼教第二部 (N=59)	保育者就職(N=47)	23.4%	12.8%	51.1%	12.8%	100.0%
	保育者以外(N=12)	25.0%	8.3%	50.0%	16.7%	100.0%

## (5) 図書館利用の頻度

図書館利用の頻度の単純集計は、表 15 のとおりである。

幼児教育学科第一部の保育者就職者、保育者以外の者との間で、図書館利用の頻度の比率に有意差はみられなかった ( $\chi^2(3, N=127)=7.591, n.s.$ )。

他方、同学科第二部においては、保育者就職者、保育者以外の者との間で、図書館利用の頻度の比率に有意差がみられた ( $\chi^2(3, N=57)=9.734, p<.05$ )。第二部の学生(二部生)は、保育者就職者が、保育者以外の者よりも図書館利用の頻度が有意に高い。この結果の背景には、二部生の授業開始時刻が 18 時と遅く、図書館利用が可能な時間帯が限られていることがあるだろう。図書館利用の時間も、大学に滞在する時間も限られた二部生にとって、保育者という進路を選択する学生ほど、積極的に図書館を利用するという傾向が読み取れる。

表 15 図書館利用の頻度

		しない	あまりしない	時々する	よくする	計
幼教第一部 (N=127)	保育者就職(N=108)	16.7%	28.7%	48.1%	6.5%	100.0%
	保育者以外(N=19)	10.5%	26.3%	36.8%	26.3%	100.0%
幼教第二部 (N=57)	保育者就職(N=45)	8.9%	15.6%	51.1%	24.4%	100.0%
	保育者以外(N=12)	41.7%	8.3%	50.0%	0.0%	100.0%

3-3-2. GPA に関する  $t$  検定

保育者就職者と保育者以外の者とのあいだで、GPA の平均値の差の検定 ( $t$  検定) を行った (表 16)。

まず、幼児教育学科第一部において、進路が保育者就職者群と保育者以外の者群との間で、2018 年度 GPA の平均値を比較した結果、5%水準で有意差がみられ、( $t(130)=2.37, p<.05$ )、保育者就職群の平均値が高かった。

次に、同学科第二部において、進路が保育者就職者群と保育者以外の者群との間で、2018 年度 GPA の平均値を比較した結果、5%水準で有意差がみられ、( $t(59)=2.12, p<.05$ )、保育者就職者群の平均値が高かった。

表 16 保育者就職者と保育者以外の GPA に関する  $t$  検定

	保育者就職者		保育者以外		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
幼教一部GPA	2.73	0.38	2.50	0.48	2.37 *
幼教二部GPA	2.76	0.49	2.43	0.40	2.12 *

\* $P < .05$  \*\* $P < .01$  \*\*\* $P < .001$ 

以上より、第一部、第二部ともに、保育者就職群の GPA の平均値が有意に高いことが明らかになった。幼児教育学科の場合、教養科目もあるが、幼児教育に関わる専門的な科目が大半であり、学科全体として幼児教育を意識した授業が展開されている。GPA はそれらの評価を反映している数値である。学生は、2 年間あるいは 3 年間の成績をみて、自身の保育者としての適性を判断している可能性がある。それが保育者就職者群と保育者以外の者群とのあいだの GPA の平均値の差の原因であるかもしれない。あるいは、保育への関心が薄くなってしまった結果 GPA が低くなり、保育者以外の進路を選択しているという可能性も残されている。これらの検討は、今後の課題である。

#### 4. 考察と結論

本稿では、秋草学園短期大学幼児教育学科の IR データの分析を行った。その知見を整理しよう。

第 2 節では、成績指標に着目した分析を行った。第一に、成績評価の「不可」の数について学年ごとに集計した結果、1 年次の平均値が高く、分散も大きいことがわかった。これは、1 年次に「不可」となる科目数が多いこと、さらに、その数のばらつきが学生間で大きいことを示している。第二に、卒業を控えている第一部 2 年次の学生の 20% 弱が、1 科目以上「不可」となり、単位を落としていることである。第三に、統計的有意差はないものの、第一部 2 年次に比べて、第二部 2 年次の「不可」が多いことである。第二部は 3 年間の課程であるが、中だるみの傾向があるのかもしれない。この中だるみ傾向については、他大学においても傾向としてみられており（小嶋ら，2018）、本校においてもそういった傾向が示された可能性がある。第四に、入試方式と GPA、および、入試方式と「不可」数の関係性についてである。第五に、入学時点での学生の満足度が総じて高く、学生は希望をもって本学に入学したことが明らかになった。

第 3 節では、幼児教育学科第一部・第二部の 2019 年 3 月卒業者を「保育者就職」と「保育者以外」の者に分類し、両者の学生生活、GPA の平均値を比較した。第一に、第一部・第二部ともに、進路の違いによる通学時間、アルバイト時間、教員への質問の頻度、授業以外の調べ学習の頻度、および、第一部の図書館利用の頻度の差については、有意差がみられなかった。つまり、進路の差によって、これらの項目で見た場合の学生生活の内容に

特段の差はない。ただし、第二部に限っては保育者就職と保育者以外の者の間の図書館利用の頻度には有意差がみられた。第二に、GPA の平均値は、第一部、および、第二部ともに、保育者以外の進路に進む者よりも、保育者就職者のほうが有意に高かった。

以上の知見から 2 つの課題が導かれる。課題の第一は、成績指標に着目した分析から導かれた、学生の学修に関するサポートのタイミングの問題である。第一部に関しては 1 年次、第二部に関しては中だるみの傾向がある 2 年次に手厚いサポートが必要である。第一部の一握りの成績不振者に関しては、卒業年次である 2 年次にも、卒業に向けての丁寧な履修指導が必要である。GPA が低い傾向にある学生については、入試方式との関連が示唆された。同様の分析を今後も継続しつつ、手厚い指導を要する学生の発見の手段のひとつとして、入試方式に着目することは、今後検討していきたい。

課題の第二は、今後調査すべき項目の検討と追加の必要性である。たとえば、第 3 節の進路と GPA の分析結果の解釈を厳密に行うには、入学時点での進路希望、毎年あるいは学期ごとの進路希望や、進路希望に変化が生じたのであればその理由を問う項目が必要である。また、学生のアルバイト時間の実態として、「10 時間以上」が最多であったが、10 時間以上の時間の区切りを設け、より精緻な実態調査が求められる。こうした調査項目の追加によって、より実りある分析が期待できる。

学生のほとんどは、秋草学園短期大学に入学したことに満足していることから、本学や本学科への期待も高いと思われる。有意義な学生生活を送れるかどうかは学生本人の努力はもちろん必要であるが、大学として適切なサポートや学生指導のあり方について、データをもとに検討していく姿勢もまた重要であろう。今後もそうした目的意識をもって、IR 推進室で調査項目やデータ分析について検討していきたい。

## 参考文献

- 阿部一晴 (2013) 京都光華女子大学における EM・IR の取り組み実践報告 大学教育改革フォーラム in 東海 2013 配布資料
- 浜田知久馬 (2012) アドミッション小委員会による学力追跡調査結果 東京理科大学教育開発センターFD 通信 第 23 号 pp.2-3
- 小嶋英二郎・石津 隆・上敷領 淳・松田幸久 (2018) 薬学部での教学 IR の試み 1—福山大学薬学部での取り組み— 薬学教育 第 2 巻 日本薬学教育学会
- 中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百 (2013) 大学の IR Q&A 玉川大学出版部
- 高橋 哲也・星野 聡孝・溝上 慎一 (2014) 学生調査と e ポートフォリオならびに成績情報の分析について 大阪府立大学の教学 IR 実践から 京都大学高等教育研究 第 20 号 pp.1-15